

11月HUGだより

情報提供者：やましろ小児科

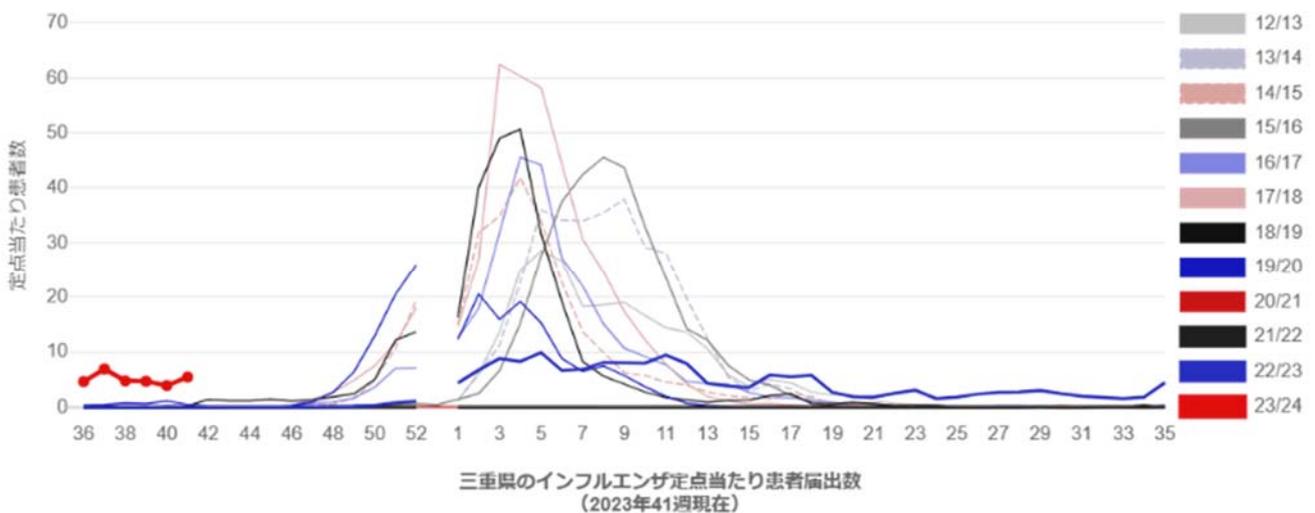
小児科医 山城武夫

11月のテーマ：インフルエンザ

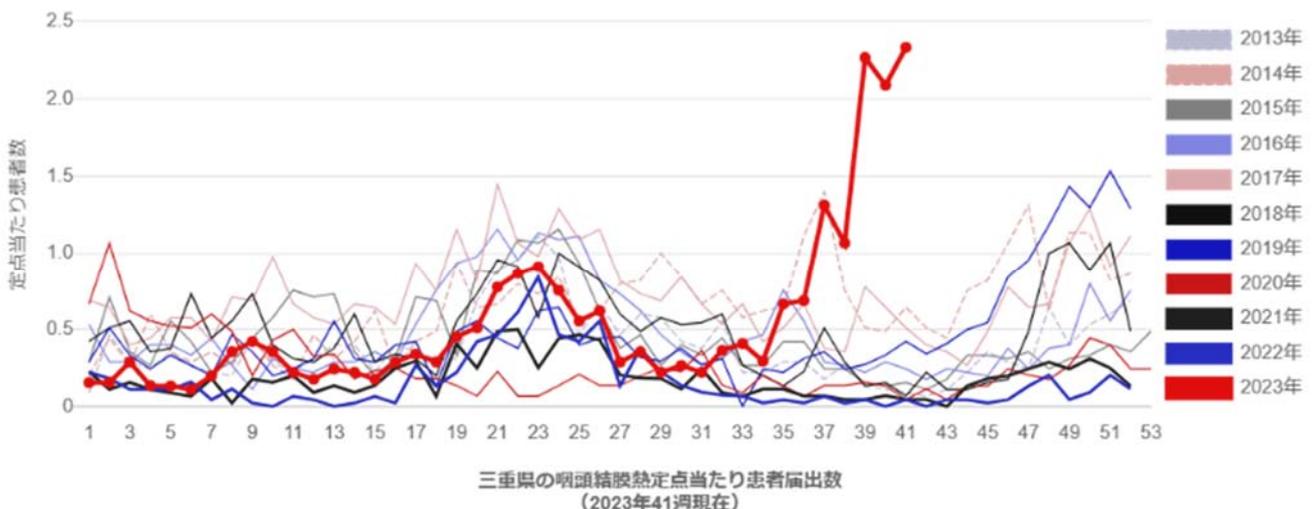
インフルエンザはご存じのように高熱、咳、全身倦怠感（だるい、ふしふしが痛い）などの症状で発症し、潜伏期間は1～3日です。約1週間で軽快します。もちろん、肺炎、脳症、脳炎、中耳炎などの合併症もあります。小児では熱性けいれん、異常行動などもみられます。



新型コロナ禍では、この3年間ほど流行がみられませんでした。10月に入り各地域で流行の兆しがあります。津市でも学級閉鎖が報告され始めました。



コロナ禍では「3つの密」、即ち「密閉空間」・「密集場所」・「密接場所」の回避を奨励されました。感染症の予防の基本で、インフルエンザの予防においてもこの対策は有効です。しかし、新型コロナが5類感染症に位置づけられ、「3つの密」が緩やかに感じて来たのではないのでしょうか。もう一つ、子どもたちは他の感染症もインフルエンザと同様に流行がなく、今年はRS感染症、咽頭結膜熱（プール熱）、手足口病なども増加しています。



インフルエンザの治療には抗インフルエンザウイルス薬が数種類あります。その有効性は有熱機関の短縮、早期投与で重症化予防があります。特に、乳児や基礎疾患があり、インフルエンザの重症化リスクが高い患児や呼吸器症状が強い患児（喘息など）には使用が推奨されています。発症後 48 時間以内、なるべく早期に使用することが大切です。種類としては、NA 阻害剤（タミフル、イナビル、リレンザ、ラピアクタなど）、RNA ポリメラーゼ阻害剤（アビガン）、エンドヌクレアーゼ阻害剤（ソフルーザ）などがあります。経口薬、吸入薬、注射薬があり、年齢、投与方法の可能性はかかりつけ医の先生にご相談ください。



予防にはワクチンがあります。インフルエンザの発症を予防する効果、学校での欠席日数を減らす効果の報告があり、また、入院を減らした報告もあります。流行予測に応じて毎年ワクチン株を設定し、A 型 2 種類、B 型 2 種類のインフルエンザに対応し、12 歳未満の小児では 1～4 週の間隔で 2 回接種が原則です。13 歳以上は 1 回接種です。65 歳以上の高齢者の発病を半数

近くに減らし、死亡率を 80% 程度阻止し、6 歳未満の小児の発病阻止には 50～60% 程度有効であるという研究報告があります。例年 10 月～12 月に接種することを推奨していますが、2019/2020 シーズン以降は流行がなく免疫を持たない小児が増えており、新型コロナウイルス感染症が同時に流行する懸念があります。冒頭にも書きましたが、この地域でもすでに学級閉鎖があり流行の兆しが見られますので早期の接種が望まれます。

